学都からの挑戦

オピニオン

あおもり農業未来図

心の問題 連携し支援

医療や教育、切れ目なく

弘前大学大学院医学研究科附属
子どものこころの発達研究センター
栗林理人特任准教授

「子どもたちの受け皿となる学校への支援、そして切れ目なく行う支援が大切」と語る栗林特任准教授

子どもの心の問題や、その支援・ケアの必要性が叫ばれる中、2014年4月、東北地区で初となる「子どものこころの発達研究センター」が弘前大学に立ち上がった。その中で研究を行い、学校などの支援に当たっているのが栗林理人特任准教授(51)だ。

◆ ◆

センター立ち上げの背景にあったのは、全国における子どもの心に関する研究者・専門家の少なさ。児童精神科領域からの支援や研究活動が不足し、東北地区でも子どもの心に対する支援が課題となっていた。

そこで設立された同センターは、同大医学部や保健学科、教育学部のほか、東北各県の教育委員会、青森県、弘前市と連携することで、さまざまな分野からの支援や研究、人材育成を行う拠点としての役割を持っている。

部門は四つ。必要な地域へ医師や臨床心理士を派遣し診療を行ったり、児童精神科医を養成する〈児童精神医学診療・研究部門〉、発症予測システムを構築する〈コホート研究部門〉、児童精神医学的疾患の治療法・予防法の開発を行う〈病態解析・治療開発部門〉、そして栗林特任准教授が携わっているのが、各地方自治体とネットワークをつなぎ、心の問題の早期発見や発達支援を行ったり臨床心理士や養護教諭らに研修などを行う〈こころの地域ネットワーク支援室〉だ。

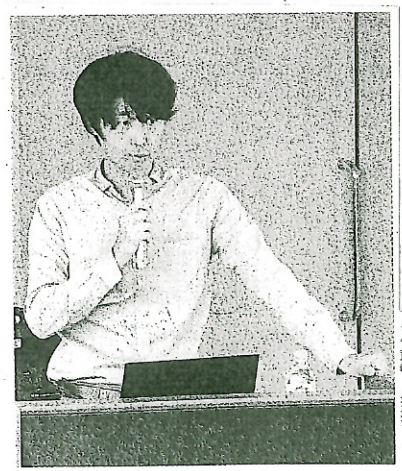
◆ ◆

柱となっているのが市内全小中学生（聖愛中を除く）を対象とした「心のサポートアンケート」。子どもたちの心の状態や生活への適応状態を把握し、学校での今後の指導や支援に役立ててもらうことが目的で、関わり方のアドバイスや、学校からの希望を受けて、出張での事例検討会の開催も行っている。

アンケートは毎年行うことで経年変化を把握し、心の状態の悪化を防ぐことにも役立てることができるほか、同様のアンケートを行っている他自治体との比較による研究にも役立てられる。

学校の子どもたちを対象としたものとしては、不登校や非行など心に関連する問題を予防するための「こころの授業」を行っており、子ども自身が心の調子を整える手だて「ストレスマネジメント」を身に付けることなどを支援している。

「以前は子ども自身の治療や親へのケアが主だった。これからは受け皿である学校の機能を維持し高めていかないと、子どもたちを育てていく環境を維持していくことは難しい。学校の支援がとても重要」と指摘する。



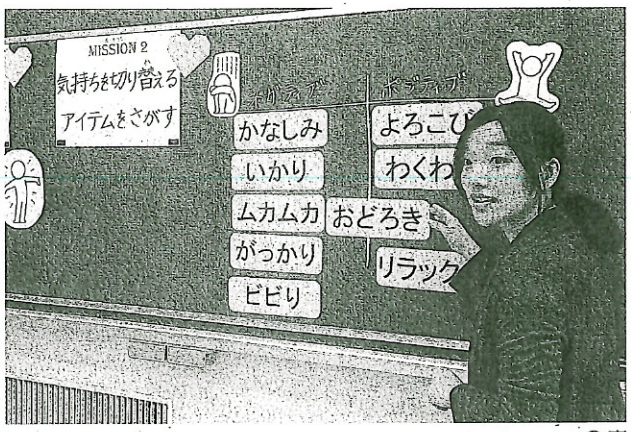
◆ ◆

学校の支援と同様に、就学前における各保育園や幼稚園での対応の差などにも課題を感じており、弘前市が今年度実施する、発達が気になる子どもの支援に向けた「保育所等巡回サポート事業」にもセンターとして参加。保育所を巡回して保育士に対し子どもの発達と特性に合わせた対応方法をアドバイスし、関わり方の部分をサポートしている。

◆ ◆

「弘前市内ではさまざまな取り組みも始まり、支援について何とかしたいという考えを持つ人が連携し始めている」と栗林特任准教授。「どんなに時代が変わっても、発達のステップや越えていく課題は変わらない。だからこそ、みんなで連携しながら、切れ目のない支援を行っていくことが大切」と力を込める。

公開講座で講演する、センターの足立匡基特任助教（センター提供）



センターでは学校支援を行っており、「こころの授業」では子どもたちの心をサポート（センター提供）

散策 ちょっと寄り道

弘大医学部・大黒松小公園

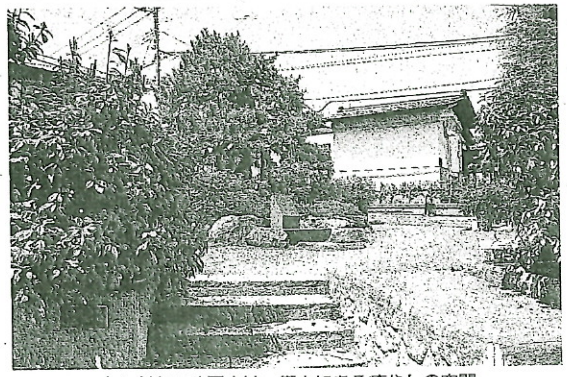
市民憩いの街角広場

しっとりとした雰囲気を醸す、弘前市本町と在府町に キャンパスを構える弘前大学医学部。その一角に整備され、〝街角広場〟として市民にとっても憩いの場となっているのが、大黒松小公園だ。

かつて長勝寺にあった献体の碑が、医学部構内へ移転されることになったのをきっかけに、1998年にみちのく銀行の寄付を受けて整備された。慰霊碑は医学部基礎研究棟北西にあった大黒松周辺に移築され、その二つが小公園の中心となっている。

このほか敷地内には「リンゴ初生りの碑」があるほか、ケヤキやコブシなどの木々が植えられ涼しげな空間。周りは垣根で囲まれベンチも設置されており、市民が一休みする姿が見受けられる。

周辺には弘前市指定の「趣きのある建物」や、前川國男建築の木村産業研究所（現弘前こぎん研究所）など重厚な建築物もあり、見どころも多い。街歩き後に、ぶらり立ち寄ってみてはいかがだろうか。



木々が多い公園内は、街中にある癒やしの空間